

《資料》

青年期女子のライフデザインと親準備性

服部 律子, 後藤 宗理

梶山女学園大学看護学部看護学科

要 旨

本研究の目的は、女性が自らの健康を維持・増進し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方が実現できるようなライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料として、青年期、中でも青年期後期の女子のライフデザインや親準備性について明らかにすることである。

対象は、A大学の資格取得を目指す2学科とそうではない2学科の1年生510人。平成25年1月に無記名自己記入式質問紙調査を実施し、479人から回答を得た（回収率93.2%）。そのうち、年齢や尺度のすべてに回答されている451人を有効回答とし（有効回答率94.2%）、統計学的に分析を行った。

その結果、約6割の学生は将来の職業を決めて1年次から努力し、約8割は将来結婚を考え、約7割が出産を考えていた。退職の時期として最も多かったのは第2子出産時であった。この時期の女子は、過去の恋愛を通して自分自身の将来の可能性などを考えたことで、結婚や子育てなどのライフイベントへの具体的イメージが高まっていると考えられた。また、恋愛経験は親準備性にも影響を及ぼしていた。

キーワード：青年期，女子，ライフデザイン，親準備性

I. 緒言

わが国では、子どもたちが将来、社会的、職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現できるよう、発達段階に応じたキャリア教育が推進されている。職業選択の時期になる青年期では、積極的にキャリア教育が実施され、社会の一員となるための様々な教育や支援が行われている。

女性についてみると、その生き方も多様化し、20歳代後半から30歳代の未婚率や、生涯非婚率も増加の一途をたどっている¹⁾。労働力人口総数に占める女性の割合は微増ながらも増加し、女性の年齢階級別労働力率では「25～29歳」と「45～49歳」を左右のピークとしたM字型の底の値が上昇傾向にあるなど、働き続ける女性も増加している²⁾。また、晩婚化や晩産化もさらに進行している¹⁾。

このような現状の中、近年、「出産適齢期」という言葉が聞かれるようになった。出産年齢が高齢化すると妊孕性が低下する³⁾だけでなく、流産率が上昇⁴⁾する。流産の主な原因が染色体異常であるなど、高齢になると染色体異常の発生頻度も増加する⁵⁾。そのため、思春期から出産年齢には「適齢期」があることを教育する必要があると言われるようになり、「出産適齢期」という言

葉が用いられるようになった。

また、医学の進歩と共に、男女それぞれの身体特性に応じた健康管理が普及してきている。

これらのことから、キャリアデザインを描くだけでなく、女性が自らの健康を維持し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方が実現できるよう、生き方全体を捉えたライフデザイン教育や支援が必要ではないかと考えられる。

先行研究では、若者たちは就職活動をきっかけとしてライフデザインを模索し、その中で親になることについて考えていることが示唆されており⁶⁾、職業選択が身近なものとなる大学生へのライフデザイン教育が重要になると考えられる。

Ⅱ. 目的

本研究の目的は、女性が自らの健康を維持・増進し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方が実現できるようなライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料として、青年期、中でも青年期後期の女子のライフデザインや親準備性について明らかにすることである。

Ⅲ. 方法

1. 調査期間と対象

A大学4学科の1年生510人を対象とした。

4学科の内訳は、資格取得を目指す学科2学科とそうではない学科2学科である。

平成25年1月に調査を実施し、479人から回答を得た（回収率93.2%）。

2. 調査方法

調査は無記名自己記入式の質問紙を用いて実施した。

質問項目は、年齢等の属性に関する質問項目、ライフデザインに関する自由記述式の質問項目と、親準備性尺度⁷⁾、Rosenbergの自尊感情尺度日本語版⁸⁾、時間的展望体験尺度^{9, 10)}、現在と過去の交際相手の有無に関する質問項目で構成した。

親準備性尺度は、若者たちの親になることに対して意識を測定する尺度で、“親になることの意義”、“子どもの養育”、“親になることへの負担感・不安感”、“親になることへの要件”、“世代の継承”という5つの下位尺度から構成されている⁷⁾。

自尊感情尺度は、人が自分自身に対して抱く評価的な感情や感覚の中でも、自己への尊重や価値を評価するRosenbergの尺度を用いた。

時間的展望体験尺度は、将来のことなどへの見通しである「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」である「時間的展望」を測定するための尺度で、“現在の充実感”、“目標指向性”、“過去受容”、“希望”の4つの下位尺度から構成される^{9, 10)}。

ライフデザインに関する自由記述式の質問項目では、質問紙上に1本の横線を引き、左端を「今」として、「将来の計画」を記載してもらうこととした。

質問紙は、調査の概要を説明し協力への同意が得られた各学科の教員の授業終了後、対象者に文書と口頭で研究の趣旨や方法等について説明した後配布し、回答後に各学科の所定の場所に設

置した回収箱に各自で投函してもらい回収した。

3. 分析方法

回答の得られた479人のうち、年齢と各尺度に漏れなく回答されていた451人を有効回答とし（有効回答率94.2％）、統計学的に分析を行った。

自由記述の項目については、記述内容からライフイベントやキャリア上のターニングポイントなどを読み取って分析した。

4. 倫理的配慮

調査は無記名で実施した。文書と口頭で研究の意義や目的、方法、協力しない場合にも不利益を被らないこと、質問紙への回答をもって協力への同意とみなすこと、結果の公表とその際にも個人が特定されることがないことなどを説明し、回答後は各自で封筒に入れて封をした後、回収箱に投函するよう依頼した。

本研究は椋山女学園大学看護学部倫理審査委員会の承認（承認番号：109）を得て実施した。

IV. 結果

対象の平均年齢は18.80（標準偏差0.51）歳であった。

1. ライフデザイン

1) 就きたい職業とそのための準備

将来就きたい職業が決まっているか否かについては、451人中350人（77.6％）が将来就きたい職業が決まっていた。

「そのための準備をしているか」という質問に対しては、将来就きたい職業が決まっていて準備もしていると回答した者と、決まっているがまだ準備はしていない者（問いに対してなし、または無回答）、就きたい職業は決まっていない（問いに対してなし、まだ決めていない、または無回答）が将来への準備はしていると回答した者、就きたい職業が決まっておらず準備もしていない

表1 就きたい職業の有無とそのための準備			N = 451	
			人数	%
就きたい職業が決まっている				
そのための準備	大学での学習		130	28.8
	大学外での学習・活動		134	29.7
	なし*1		86	19.1
就きたい職業は決まっていらない*2				
将来への準備	大学での学習		3	0.7
	大学外での学習・活動		16	3.5
	なし*1		82	18.2

* 1：将来就きたい職業のための準備をしているかという質問に対し、「なし」と回答した者と無回答（空欄）の者の数を合計した人数

* 2：将来就きたい職業に関する質問に対し、「なし」「まだ決まっていない」と回答した者と無回答（空欄）の者の数を合計した人数

表2 ライフデザインとして記述されたライフイベントやキャリア上のターニングポイントの数

	平均個数	標準偏差	N
ライフイベント	3.73	1.53	385
キャリア上のターニングポイント	2.51	1.39	385
記述された合計のポイント	6.25	2.39	384

表3 結婚と第1子出産の時期

結婚の時期 (N = 366)				
具体的な年齢を記載している者	315人 (86.07%)			
	平均年齢	26.28歳	標準偏差	1.69歳
年齢は漠然としている者	51人 (13.93%)			
第1子出産の時期 (N = 330)				
具体的な年齢を記載している者	267人 (80.91%)			
	平均年齢	27.65歳	標準偏差	1.79歳
年齢は漠然としている者	63人 (19.09%)			

者（いずれにも「なし」、「未だ」、無回答の者）に分かれた。さらに、準備の内容は「今大学で勉強していること」などのように大学での学習が将来への準備だと位置づけている者と、大学での学習以外に学習（資格試験準備など）や活動をしている者に分かれた。

就きたい職業が決まっているか否かとその準備の組み合わせの結果をみると、表1に示したように、「将来就きたい職業が決まっていて、大学以外でも学習や活動（資格を取得するなど）をして準備をしている」が134人（29.7%）と最も多く、次いで「将来就きたい職業が決まっていて、その準備として大学での学習をしている」130人（28.8%）となっていた。

「就きたい職業は決まっているがまだ何も準備していない」と認識している者が86人（19.1%）、「就きたい職業も決まっていなし、準備もしていない」という者が82人（18.2%）あった。

2) ライフデザイン

回答された「将来の計画」からどの程度自分自身の将来を具体的に考えているかを検討するため、結婚や出産などのライフイベントと、就職、転職、起業、退職、資格取得などのキャリア上のターニングポイントが記述された個数を数えた。

ライフデザインについての自由記述による回答をみると、385人（85.4%）が結婚、出産、夫との死別などのライフイベントを記述しており、その個数は平均3.73（標準偏差1.53）個であった（表2）。

451人中366人（81.2%）が「結婚」を挙げており、その予定年齢は平均26.28（標準偏差1.69）歳であった。また、330人（73.2%）が1人以上の子どもの出産を挙げており、第1子のお産予定年齢は27.65（標準偏差1.79）歳となっていた（表3）。

キャリアについては、就職、退職、再就職など、平均2.53（標準偏差1.40）個の記述があり、結婚や出産、転職や退職について具体的にイメージされていた。退職を考えている時期は表4に示したような結果であった。ライフデザインの中に退職の時期を挙げていたのは451人中228人（50.6%）であった。退職の時期としてもっとも多かった時期は「第2子出産時」であった。

表4 退職の時期 N = 228

退職の時期	人数	%
結婚する時	17	7.5
第1子出産時	31	13.6
第2子出産時	156	68.4
定年時	20	8.8
その他	4	1.8

表5 交際相手の有無別にみた将来のイメージの具体性

交際相手の有無		記述されたライフイベント／キャリア上のターニング ポイントの個数 (平均±1SD)		<i>t</i>	
現在交際している相手					
		[ライフイベント]			
あ	り (N = 103)	3.90 ± 1.43		1.41	ns
な	し (N = 280)	3.66 ± 1.57			
		[キャリア上のターニングポイント]			
あ	り (N = 103)	2.55 ± 1.51		0.38	ns
な	し (N = 280)	2.49 ± 1.35			
過去に交際していた相手					
		[ライフイベント]			
あ	り (N = 246)	3.92 ± 1.46		3.39	<i>p</i> < .01
な	し (N = 136)	3.38 ± 1.61			
		[キャリア上のターニングポイント]			
あ	り (N = 246)	2.53 ± 1.44		0.43	ns
な	し (N = 136)	2.47 ± 1.31			

表6 親準備性尺度の得点 N = 451

下位尺度 (満点)	平均点	標準偏差
親になることの意義 (48)	41.01	5.20
子どもの養育 (56)	51.41	4.88
親になることへの要件 (20)	17.42	2.23
世代の継承 (12)	8.58	2.03
親になることへの負担感・不安感 (36)	28.11	4.33

次に、将来のイメージの具体性を、ライフイベントやキャリア上のターニングポイント等について記述された個数と考え、イメージの具体性に関連する要因について検討した。ライフイベントやキャリア上のターニングポイントとして記述された個数と、親準備性尺度の各下位尺度、時間的展望体験尺度、自尊感情の各尺度得点との間でPersonの積率相関係数を求めた結果、ライフイベントの記述の個数と親準備性尺度の“親になることの意義”との間に弱い正の相関が認められた ($r = .22, p < .001$)。その他の尺度得点との間には相関は認められなかった。

さらに、交際相手の有無別に記述されたライフイベントやキャリア上のターニングポイントの数を比較した結果を表5に示した。過去の交際相手の有無別で、ライフイベントの個数に有意な差が認められた ($t(380) = 3.39, p < .01$)。

表7 交際相手の有無別にみた親準備性尺度の得点

下位尺度	交際相手あり (平均±1SD)	交際相手なし (平均±1SD)	t	
[過去の交際相手の有無]	N=280	N=162		
親になることの意義	42.11±4.97	39.86±5.23	4.42	p<.001
子どもの養育	51.86±4.87	50.86±4.78	2.11	p<.05
親になることへの要件	17.64±2.21	17.15±2.20	2.26	p<.05
世代の継承	8.77±2.11	8.25±1.89	2.67	p<.01
親になることへの負担感・不安感	28.19±4.57	28.06±3.88	0.32	ns
[現在の交際相手の有無]	N=118	N=327		
親になることの意義	42.09±5.07	40.99±5.19	2.02	p<.05
子どもの養育	52.08±4.70	51.26±4.88	1.60	ns
親になることへの要件	17.75±2.22	17.35±2.21	1.67	ns
世代の継承	9.03±2.00	8.43±2.03	2.79	p<.01
親になることへの負担感・不安感	28.98±4.40	27.86±4.26	2.40	p<.05

2. 親準備性

親準備性尺度の各下位尺度の点数は表6に示した通りであった。

親準備性に関連している要因を検討するため、親準備性尺度の各下位尺度の得点と、自尊感情尺度、時間的展望体験尺度の得点との相関を求めたが相関は認められなかった。

次に、交際相手の有無別に親準備性尺度の各下位尺度の点数を比較したところ、表7のような結果であった。過去の交際相手の有無で、“親になることへの負担感・不安感”以外の全ての下位尺度で有意な差が認められていた。現在の交際相手の有無別では、“親になることの意義”、“世代の継承”、“親になることへの負担感・不安感”で有意な差が認められていた。

V 考察

1. ライフデザイン

今回の結果では、77.6 %が将来就きたい職業が決まっていた。資格取得を目指す学科であるか否かに関わらず、1年生の時点で、ある程度将来どのような職業につきたいかを決めていることが分かった。また、その中の約75 %の学生が「大学での学習がそのための準備」や「大学以外でもそのための学習や活動をしている」と答えており、全体でみると約6割の学生は将来の職業を決めて1年次から努力していることがわかった。

これは、高校でのキャリア教育が活発に行われるようになり、ある程度将来の自分の「仕事」を考えて進学していることによるものではないかと考えられた。

ライフデザインでは、就職から結婚、出産などを経て、退職、その後の生き方まで、平均で6.25個のターニングポイントを記述しており、ある程度具体的に将来のことをイメージしていることがわかった。中でも、今までに交際経験のある女子では記述されたライフイベントの数が有意に多くなっていた。Arnettらは18歳から25歳をEmerging Adulthoodの時期として、この時期、恋愛や就労を通して様々な将来の可能性を試みると述べている¹¹⁾。過去の恋愛を通して、自分自身

の将来の可能性などを考え模索したことで、より生き方、中でも結婚や子育てなどのライフイベントへの具体的イメージが高まったのではないかと考えられた。

平成22年度の「妻の初婚年齢」では全国平均が28.9歳である¹²⁾のに対し、今回の調査の結果では26.28歳と、低年齢になっていた。また、平成22年度「第1子出生時の母の平均年齢」では全国の平均が30.0歳である¹³⁾のに対し、今回の調査結果では27.65歳と低年齢になっていた。「出産適齢期」教育の必要性が言われ始めたのがこの1、2年であることを考えると、その教育効果とは考えにくい。この点については、この年齢の女子の特徴であるのか、この集団の特徴であるのか、今後調査を積み重ねながら検討していく必要がある。

さらに、退職の時期で最も多かったのが第2子出産時となっており、1人の子育ては働きながらもこなせるが、2人になった時に子育てと就労の両立は難しいと考えていることがわかった。社会制度の整備の必要性もあるが、育児支援制度の活用やフォーマル、インフォーマルなサポート体制の構築の支援の必要もあると考えられた。

2. 親準備性

先行研究の結果では、過去に交際経験のある者のほうが“親になることへの負担感・不安感”が有意に低くなり、現在交際相手のある者では“世代の継承”が有意に高くなるという結果が得られていた¹⁴⁾、今回の結果では、過去の交際経験のある者では“親になることへの負担感・不安感”以外の全ての得点が有意に高くなるという結果が示された。また、現在の交際相手の有無でも、交際相手がいる者では“親になることの意義”、“世代の継承”、“親になることへの負担感・不安感”の得点が有意に高くなるという、異なる結果が示された。Arnettらがこの時期は恋愛や就労を通して様々な将来の可能性を試みると述べている¹¹⁾ことから、恋愛経験は、青年期女子の親準備性に影響を及ぼしていると考えられた。

先行研究との違いについては、性別や年齢からくる特徴であるのか、この集団の特徴であるのかを、さらに調査を重ねながら検討していく必要があると考えられた。先行研究では就職活動をきっかけに将来を模索し、親になることを意識するきっかけになることが明らかとなっており⁶⁾、学年進行に伴う変化と合わせての検討も必要である。

VI 結語

今回、大学1年生の女子を対象としたライフデザインと親準備性に関する研究から、次のようなことが明らかとなった。

1. 約6割の学生は将来の職業を決めて1年次から努力している。一方、「就きたい職業は決まっているがまだ何も準備していない」、「就きたい職業も決まっていななし、準備もしていない」という者がそれぞれ約2割程度認められた。
2. 過去の恋愛を通して、自分自身の将来の可能性などを考え模索したことで、結婚や子育てなどのライフイベントへの具体的イメージが高まっていると考えられた。
3. 約8割の者が将来結婚を考え、約7割の者が出産を考えていた。結婚予定年齢の平均は26.28歳、第1子出産予定年齢の平均が27.65歳と、近年の全国平均よりも約1歳程度低くなっていた。この点については、この年齢の女子の特徴であるのか、この集団の特徴であるのか、今後さらなる検討が必要である。

4. 約半数は具体的に自分の退職の時期をイメージしており、退職の時期を具体的に考えている者の約7割が第2子出産時を退職の時期と考えていた。青年期の女子は、1人の子育ては仕事と両立できても、複数子どもを育てながら仕事を続けることは不可能だと考えていることが明らかとなった。
5. 過去に交際経験のある者では、そうでない者と比べ、親になることの意義や子どもの養育、親になることへの要件、世代の継承への意識が高く、親準備性が高くなっていた。現在交際中の者も同様に親になることの意義や世代の継承への意識は高くなっていたが、その一方で親になることへの負担感や不安感も高くなっていた。恋愛を通じた将来の可能性の模索が親準備性にも影響していると考えられた。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様に深謝致します。また、データの最終整理の段階でご助力くださった椋山女学園大学看護学部松浦知穂助手に感謝いたします。

本研究は平成25年度椋山女学園大学学園研究奨励（B）の助成を受けて行いました。

文 献

- 1) 内閣府：平成26年版 少子化社会対策白書、2014、「少子化の現状」(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2014/26pdfhonpen/26honpen.html>, 2014.2.20)
- 2) 厚生労働省：平成24年版 働く女性の実情、2013、「I 働く女性の状況」(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/12b.pdf>, 2014.2.20)
- 3) 小池浩司：4) 高齢不妊婦人の問題点 ②卵巣機能不全、日本産科婦人科学会誌、52 (9)、N278 -N281、2000
- 4) 上田克憲：高齢不妊婦人の問題点 ③流産、日本産科婦人科学会誌、52 (9)、N282 -N285、2000
- 5) 大場隆：高齢妊娠、上田森生・山中快子・矢内良太他、病気が見える10産科（第3版）、MEDIC MEDIA、74 -75、2013
- 6) 服部律子・後藤宗理・中嶋文子他：大学生男女が親になることについて考えるきっかけ、椋山女学園大学看護学部紀要、1、97 -105、2009
- 7) 服部律子：親準備性尺度作成のための因子抽出の試み、思春期学、26 (4)、428 -432、2008
- 8) 山本真理子・松井豊・山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造、教育心理学研究、30、64 -68、1982
- 9) 白井利明：時間的展望体験尺度の作成に関する研究、心理学研究、65、54 -60、1994
- 10) 白井利明：時間的展望の生涯発達心理学、勁草書房、1997
- 11) Jeffrey J. Arnett: Emerging Adulthood: Understanding the New Way of Coming of Age, Jeffrey J. Arnett and Jennifer L. Tanner, *Emerging Adults in America*, American Psychological Association, 3 -19, 2006
- 12) 厚生労働省：人口動態統計、2013、「平成22年度妻の平均初婚年齢、妻の職業（大分類）・都道府県（20大都市再掲）別」(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001108276>, 2014.12.25)
- 13) 厚生労働省：人口動態統計、2013、「平成22年度出生数・母の平均年齢及び標準化出生率・出生率（女性人口千対）、母の年齢（5歳階級）・母の職業（大分類）・出生順位別」(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001108272>, 2014.12.25)
- 14) 服部律子：青年期における親準備性の形成、名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士論文、49 -71、2008

Life Design and Cognitive Readiness for Parenting among Adolescent Girls

Ritsuko HATTORI and Motomichi GOTO

Sugiyama Jogakuen University School of Nursing

Abstract

This study aims to highlight the life designs and cognitive readiness for parenthood among adolescent girls to serve as a base for studying the current state of life design education that can allow women to maintain and enhance their own health and perform their roles in society, all through their unique lifestyles.

The participants included 510 female students in their first year of undergraduate schools, from two departments aiming to obtain licenses from A University and two departments not aiming for the same. An anonymous self-report questionnaire survey was administered in January 2013, and responses were obtained from 479 students (response rate = 93.2%). Among these, 451 students responded to all items, including age and all the scales; these responses were considered valid (valid response rate = 94.2%) and were statistically analyzed.

The results showed that approximately 60% of students had decided on a future occupation and had begun working towards it from the first year; about 80% were thinking about marrying and about 70% were thinking about having children. The most frequently indicated timing of leaving work was after the birth of their second child. Thinking about the possibilities of their future through their past romantic relationships seemed to help girls at this age to have a more specific image of life events, such as marriage and childrearing. Also, experience in romantic relationships had a positive effect on their cognitive readiness for parenting.

Keywords: adolescent, girls, life planning, readiness for parenthood